

た心敬や宗祇に、兼載は教えをうけたのでした。

全国の各地に連歌をひろめていった連歌師たちも、京都の連歌の集りで有名になるのが夢だつたのです。その京都の連歌の中心は北野天満宮でした。京都の天神さまをまつつた神社です。

連歌の席では、多くの場合、床の間に天神さまの軸をかけます。兼載が初めて連歌を学んだ諏訪神社も、天神さまをあわせてまつていました。兼載の生まれたのは天神浜、天神さまの紋章はどこでも梅のかたち、兼載の小さい時の名は梅——こうならべてくると兼載と天神さまのかかわりの深いことがわかります。やはり兼載は天神さまの申し子であつたのかもしれない。

二十四歳になつた兼載は、さつそうとして京都北野天満宮の連歌の席にあらわれしました。しかも、その席は、そのころの幕府の実力者であつた畠山政長の開いた連歌の席でした。連歌師たちの間で、すでに兼載の名が認められていた